
[成果情報名] イチゴ「あまおう」の早期作型での安定生産を確実にする第1次腋花房誘導苗育成技術

[要約] 定植前に頂花房と第1次腋花房の準備を整えた第1次腋花房誘導苗は、低温暗黒処理により頂花房を分化させた後に寒冷紗被覆下で3週間程度の再育苗を実施し、その期間中、窒素成分約70~100mg/株程度施用することで育成できる。

[キーワード] イチゴ、早期作型、第1次腋花房

[担当部署] 筑後分場・野菜チーム

[連絡先] 0944-32-1029

[対象作物] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

イチゴ「あまおう」の早期作型では、定植後の気象条件や株の栄養状態により第1次腋花房の分化が遅れやすいため、翌年の1~2月には収穫の中休み、3~4月には収穫の大きな山ができることが多い。このため、生産現場では出荷量の平準化技術として、定植後に寒冷紗被覆やかん水制限など種々の対策が講じられているが、その後の気象によっては効果が十分でない場合も懸念される。

そこで、定植後の気象条件にかかわらずイチゴの早期作型での安定生産をより確実にするために、定植前に頂花房と第1次腋花房の準備を整えた苗（以下、第1次腋花房誘導苗）を育成する技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 第1次腋花房誘導苗の育成は、定植前に低温暗黒処理に続いて遮光率50%の寒冷紗被覆下で再育苗を行うことで可能となる（図1）。
2. 再育苗は、9月上旬から3週間程度寒冷紗被覆し、窒素成分約70~100mg/株程度（「花むすめ（IB-S1号）2粒/株相当）を施用する（図1、一部データ略）。
3. 本技術を用いて育成した第1次腋花房誘導苗の年内収量は、収穫開始がほぼ同時期となる慣行の株冷Ⅳ型（入庫8/23、定植9/15）よりもやや少ないものの、1~2月の合計収量は1.5倍程度に、3月の収穫の山は0.7倍程度になり平準化が図られる。また、総収量は約4.5t/10aで株冷Ⅳ型と同等で、品質、粗収益についても同等である（図2、一部データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 出荷量平準化技術として活用する。
2. 定植日が9月下旬になるので、定植作業の分散化も図ることができる。
3. 再育苗後、第1次腋花房の花芽は肥厚初期程度の状態であるが、頂花房のように検鏡による分化の確認は待たずに再育苗後速やかに定植する。

[具体的データ]

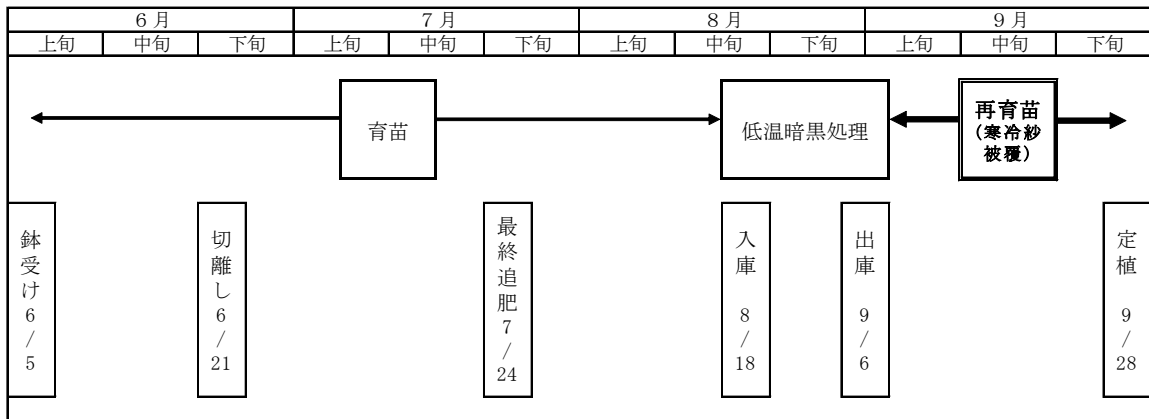


図1 第1次腋花房誘導苗育成手順

- 注) 1. 育苗は、9cmポリポット、雨よけ棚式育苗。
 2. 低温暗黒処理は10～15℃の変温管理、2日間陽光処理(「主要野菜の栽培技術指針(第9版)」)。
 3. 再育苗時は、寒冷紗(遮光率50%)被覆。
 4. 日付は目安。

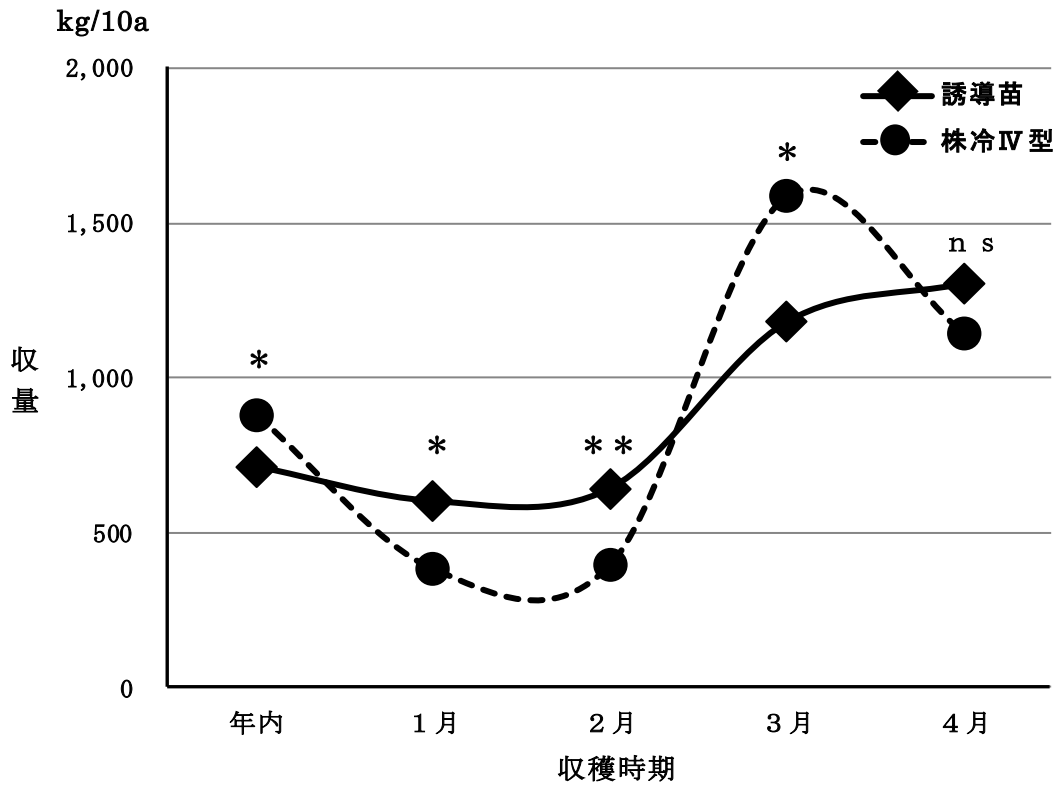


図2 第1次腋花房誘導処理と株冷IV型の時期別収量(平成22、23年)

注) **は1%、*は5%水準で有意差有り。nsは有意差なし(t検定)。

[その他]

研究課題名: イチゴ「あまおう」の第1次腋花房誘導苗による新造型開発

予算区分: 経常

研究期間: 平成23年度(平成22～23年)

研究担当者: 下村克己、森山友幸